

# 陸生ホタル研

No.78

2016年1月31日

陸生ホタル生態研究会事務局

電話：FAX042-663-5130

Em:rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.jp

## 蛍みてあるき in タイ（Ⅱ報）

若杉和男 平田秀彦（文責）

### （1）はじめに

2014年7月にタイ王国を訪れる機会があったので、チェンマイ県の2か所でホタルを観察した。タイ国のホタルについては調査月報44号（2012年11月）で簡単な紹介をしたが、その時も触れたようにツアーの主題は「植樹イベント」で、ツアーメンバーは我々を「蛍組（ほたるぐみ）の二人」と呼ぶ。蛍をキッカケに植物や自然に関する話題でも盛り上がり、参加者の多くは旅の楽しみが広がったようだ。

### （2）ドイ・インタノン山麓に乱舞するホタル

ドイ・インタノン山はバンコクの北約600kmに位置するタイ国の最高峰。周辺の森林は国立公園に指定されている。この時期、深い霧に覆われることが多く、この日（7日）も頂上にあるタイ空軍のレーダーサイトやプミポン国王とシリキット王妃の還暦を記念して建立された仏塔からの眺望が効かない。

日本アルプスの森林限界は2,500mだが、ここ北緯18度35分の標高2,565mには高木が鬱蒼と茂っている。しかも普通の車でスイスイと来る訳だから、急峻という雰囲気はない。が、確かに寒い。（図1）



（図1）濃霧に覆われるドイ・インタノン山頂の駐車場



(図2) ロイヤルプロジェクトの農場

山裾に展開されるロイヤルプロジェクトとは、1950年代にスタートしたタイ王室プロジェクト。山岳民族のケシ栽培を放棄させるため、この一帯では花卉や野菜が大規模に栽培されている(図2)。私たちはこの一隅にサクラを記念植樹した。

その日、園内の宿泊施設(コテージ)(図3)に荷物を置いて、明るいうちに近辺を散策しながら先ず土地勘を養った(図4)。



(図3) コテージ



(図4) 観察会の下見

遊歩道が整備されてはいるが、日本の公園やゴルフ場とは一味違う素朴で田舎の味。目線を上げると山の岩肌に滝が見える(図5)。あの水は一体どこから来るのだろうか、つい考えてしまうが……アジア大陸の広大な流域などおよそ想像がつかない……。遊歩道の脇をその滝からと思われる水が音を立てて流れている。



(図5) 滝と圃場

常夏のタイとはいえ標高 1,300m 余り。日没後の気温は 20℃を下回っているようだ。またタイの雨季は日本の梅雨とは違うと聞いているものの、山岳の所為かシトシトと降っている。お蔭で宵月が姿を見せない。

20 時頃、コテージ前に 6 人が集合した。先頭に若杉が最後尾に平田がついてゆっくりと暗闇に向かった。それこそ、50m も進まないうちに「アッ、光った！」という若杉の一声を追って歓声上がる。草むらの地上 1~2m という比較的低い位置をポーッと、ポーッと黄緑色の強い光を揺らしてゆっくりと飛翔している。

そのうち雨が止んだ。気を良くして前進すると、谷川にせり出したデッキ(図 6)の下にホタルが乱れ舞っていた。若杉が捕虫網を差し出すと、突然一匹が真っ赤な強い光を放ちながら急降下した、まるで火球。信じられない、摩訶不思議な光景だったようだ。今回は現地のホタル情報ゼロで臨んだが、幸運な出会いに心が躍った。



(図6) ここで昨晚、ホタルが乱舞していた。水は滔々と流れ、葉っぱが雨で光っている。

捕獲したホタルは2種類だった。(図7、8) この環境からして「もしや、水生……」  
と思いたくなる。



(図7) インタノン山麓のホタル  
体長 17mm 種不明



(図8) インタノン  
山麓のホタル、体長 8mm *Asymmetricata circumdata*

「娯楽施設皆無の山岳の宿なんて、サッサと寝るか本を読むしかない」と言いそうな人にはナイトハイクをお勧めしたい。

### (3) 住宅街の空き地を飛ぶホタル



(図9) 若杉



(図10) 捕虫網を振る

チェンマイ市内で8日、夕食後の予定は定番のナイトバザールとなっていたが、蛍組の二人は現地の友人が運転する車で国道108号線を南下した。「弟の家の近くに Hing-hoi がい

る」と友人は言うのである。さて、1時間ぐらい走っただろうか、降りたところは商店や住宅それに倉庫のような大きな建物などがある。弟さんは200mほど先のブッシュへ案内してくれた。背丈ほどの雑草や灌木はあるが、藪漕ぎするほど密生していない。(図9、10)

仰げばホタルが飛んでいる。地上3mを超えるほどの位置をスーッとかなり速いスピードで動いていくものもある。ここでも2種のホタルを捕獲した。(図11、12)



(図11) チェンマイ郊外のホタル  
*Pyrocoelia tonkinensis*



(図12) チェンマイ郊外のホタル 体長8mm *Luciola filiformis*

暫くして蚊にボコボコと刺されていることに気付いた。おまけにここでは、カチ割り氷を放り込んだビールも飲んだことだし、いささか気になったが下痢や発熱には見舞われなかった。長袖は必須のようだ(日本ではいつもそうしているのに)。

後日、Google mapで確かめるに、チェンマイ市街から南へ25kmほどの街道沿いで、田圃を埋め立てた工場等の用地(今のところ未利用)と推測される。標高は約300m。

#### (4) 灯台下暗し

チェンマイ空港で帰国便を待つ間に現地の人に聞いてみた「ホタルはいるか?」と。すると「ホタル?・・・いるよ、いくらでも。空港の周りに」と返ってきた。ウーン、残念。またの楽しみとして今日は帰ろう。19時20分、バンコクに向けて離陸した。又もや珍道中記と相成りました。

## 番外編 その1

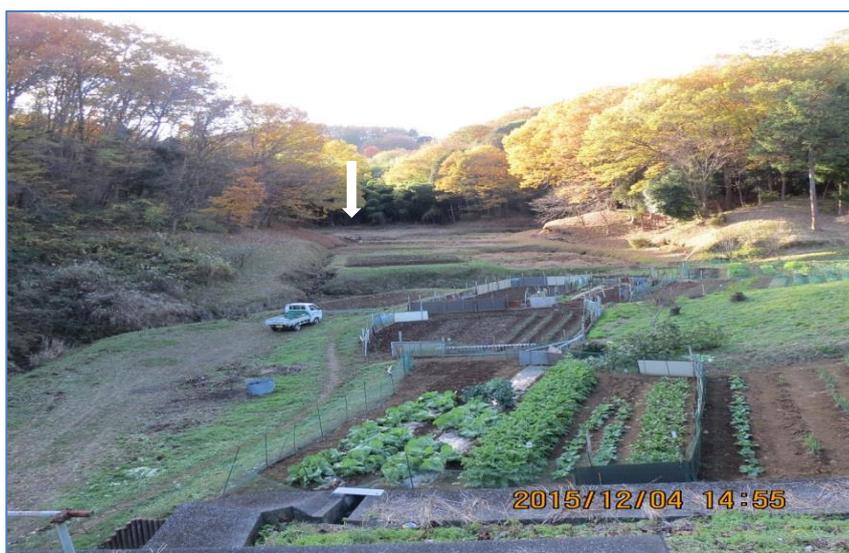
# 紅葉に映える若者・・・誰に頼まれた訳でも無く

谷戸の荒廃が気になり自分流にお手伝いしています

陸生ホテル研 事務局 小俣軍平 (文責)

昨年の暮れのこと、東京都八王子市の多摩丘陵西端点にある谷戸を歩いていると、神奈川県ナンバーのトラックが一台止まっていました。奥の方を見ると人影があります。地主さんだろうと思って、この谷戸のゲンジボタルの事をお聞きしたいと近づいていきました。すると、20代の若者が一人黙々と橋を架ける作業をしていました。

1 : 図 八王子市 寺田町 (見えてはいませんが、奥の霞の中に高尾山があります)



2 : 図 小島正治 氏

地主さんかと想ったのは、お隣の神奈川県相模原市の方でした。

「お一人で、どうしてここに橋を・・・」  
と、お聞きしてみました。

「この前ここを丘陵歩きで通りかかったら、農作業をしていた老人の方が、後継者がいなくて谷戸が荒れ始めている…と嘆かれていました。そこで、今日は家から廃材を持ってきて、農作業がし易いようにここに橋を架けています。別に依頼されたわけではありませんので、気に入って使って頂けますかどうか・・・」、といます。



小島様は、父上と一緒に大工さんをしているのだそうです。この日は本来ならば建築現場で父上と一緒に家を建てる仕事をするはずでしたが、それを取りやめて、廃材を活用した橋を設計し、一日かけて加工した資材をトラックに積み、工具を携えてここに来てボランテアで橋を架ける作業をひとりですしているわけです。

「今日、一日仕事を休むことについて、父上は何と……？」

野暮な私の質問に……、小島様は、

「父は別に何とも言いませんよ……、私のやることに賛成ですから……」

と笑顔で答えます。

多摩丘陵を歩き始めて 54 年になりましたが、その間に老人から幼児まで、数え切れない程沢山の人々に出会ってきました。しかし、この日の小島様のような若者に出会ったことはありません。

せめて写真を撮らせてくださいねと、カメラを向けると橋を架ける作業をつづける小島様の姿には、初冬の谷戸の紅葉が陽に映えて御光が射していました。

## 番外編 その2

### 湿地で育つゲンジボタルの幼虫の謎解きに迫る

陸生ホタル研事務局 小俣軍平（文責）

#### (1) はじめに

以前から問題になっているゲンジボタルの生態に関する謎の一つに、棲息地の自然環境を巡る問題があります。同じ水生のホタルでも、ゲンジボタルの幼虫は、ヘイケボタルの幼虫と異なり、溶存酸素量の関係で湿地には棲息できないと言われていました。しかし、実際には、ゲンジボタルの幼虫は、全国各地で川の流れではなくヘイケボタルやスジグロボタルの幼虫の棲息する湿地に暮らしている例は数多く見られます。珍しい事ではありません。

そこで、今年の 11 月からこの謎解きをするために、ゲンジボタルの成熟幼虫 2 匹（体長 32mm）とヘイケボタルの成熟幼虫 1 匹（体長 14mm）を、15cm×22cm×7.3cm のプラスチックの小さな容器の中でエアポンプを付けずに飼育しています。中に大きさ 5cm 程の石と木片を各 1 個入れてあります。水の深さを、これら木片・石の上面すれすれに抑えてあります。飼育開始から間もなく 3 ヶ月になりますが、3 匹とも元気で興味深い現象が見られます。

#### (2) 餌の取り合いも無く仲良く暮らす幼虫を観察していると……

晩秋から冬期にかけてですから夏期のように幼虫の動きは活発ではありません。餌のカワニナ・ミミズの捕食もそれぞれこの 3 ヶ月間で 2 個と 1 / 4 匹（ミミズ）です。食べないときには動きは少なく、物陰に隠れていたり、石の上や木片の上に登っていたりします。

ゲンジボタルとヘイケボタルの幼虫が、餌の取り合いで争うような事もなく、仲良く暮らしています。

次の 1 : 図の場合は、ゲンジボタルのお腹の下にちゃっかりとヘイケボタルの幼虫が潜り込んでいます。黄色の円の所に頭が見えています。水位が石や木片の上面とすれすれに押さえてありますので、ゲンジボタルの幼虫は、ご覧のように、背板から側板の部分は水

面から出ています。これは、湿地に暮らすスジグロボタルの幼虫の生態とよく似ています。

1：図



次の2：図の場合ですが、目視で観察する限りこのゲンジボタルの幼虫は、ここで、側板についているエラを使って空気中から酸素を取りこんでいるように見えます。本当にその様な事ができるのかどうかは、幼虫の解剖をしてエラの構造や機能を調べないとはいけませんが……。こうしたポーズで過ごす時間は不定期で、時間の長さもまちまちです。長いときは半日いる場合もあります。短いときは10分程で降りてしまうこともあります。

2：図



3：図

2：図をトリミングしたもので、2匹とも側板のエラが白く伸びていることが目視でも確認できます。



冷蔵庫で食品の保存に使うバットを使った実験ですから、室内で誰でも簡単に取り組みます。会員の皆さん方、今年のホタルのシーズンになりましたら、どうぞ同じような観察実験で追試をしてみてください。そして結果を月報に投稿してください。

## おわりに

### ① ザリガニは、ホタルの幼虫を食べる？

これも、ホタルの観察会や施設造りの場で、どこでも良く聞く話です。しかし、食べるか食べないか、正確な報告をまだ見たことがありません。昨年秋11月に名古屋市守山区にある公園予定地を訪れた時にも、現地の方々から質問が出ました。そうしましたら、この度、名古屋市にある名城大学の原 彰先生から、この問題に関する観察実験結果の報告が届きました。次号79号にこれを掲載いたします。お楽しみに……。

### ② 若い人々との定例の研究会を始めます

一昨年からはじめた、中 毅士氏のゲンジボタル幼虫の食餌を巡る目の覚めるような研究結果を頂いて、発足以来、10年目を迎えた陸生ホタル研としても、新たに、今年の4月をめどに若い人々とのホタルに関する定例の研究会を始めることにしました。

会場は JR 八王子駅北口前の東急スクエアビル12Fにある、八王子市の学園都市センター第4セミナー室を予定しています。開催は月1回のペースです。詳細は、3月になって改めてお知らせいたします。宜しく願いいたします。